

パソコンを使うための本について

今、まさにパソコンブームである。

パソコンの出荷台数は大きく伸び、秋葉原は電気街ではなくパソコン街になった。昨年は、ウィンドウズ95の発売が社会現象のように報道された。

パソコン自体が、街角の店に並び個人でも手が届くようになったのは、10年以上も前であったと思うが、当時は、今のように老若男女がそろってパソコンに興味を持つという状況ではなかった。最近のパソコンブームは、パソコンの性能の向上により、仕事に使うにせよ、家庭で使うにせよ、パソコンが生活の中で活躍できるだけの能力を持ってきたことがその基礎にあると思う。また、ソフトウェアの発達によって、プログラムを作るとか、命令を覚えるとか、かつてはコンピュータを使うためには必須であっためんどうな知識がなくても、十分パソコンを使うことができるようになったことも大きく寄与していると思う。

ところで、パソコン関係の図書も花盛りである。本屋の書棚の大きな部分を占め、いつもそこだけ人だかりである。

どのような本が書棚に並んでいるのだろうか。新しい機種や新しいゲームソフトなどの紹介が中心の月刊雑誌等を別にすると、まず目につくのが代表的なビジネスソフトの解説書である。ワープロソフトやデータベースソフトを始めとして、各ソフトメーカーの代表的な製品についての機能や使い方についての本が並んでいる。

これに次いで、パソコンの基本ソフト（OS：オペレーティングシステム）の解説書が多い。一昔前は、MS-DOSの解説書が中心だったが、

今はウィンドウズ等の新しいOSが主役である。

このあたりになると本の厚さも厚くきれいな表紙のわりには中身は結構ごついものが多い。

一方、最近、急激に伸びてきたのは、パソコンネットワークやインターネットの使い方の解説書である。この分野の本が目につくようになったのは、ほんの1年程前からであり、いかに急速にコンピュータネットワークへの関心が高まってきたかが感じられる。

以上のようなジャンルの本で、コンピュータ関係の書棚の大半が占められており、あと残されたわずかな場所に、昔ながらのコンピュータ言語やコンピュータの仕組みに関する理論書などが並んでいる。時々、書籍扱いのソフト（電子図鑑や電子地図など）が棚の隅に置かれている。

ざっとこんな具合である。もちろん統計的に調べたわけではなく多分に個人的な経験と感覚によるものである。

ここで考えてしまう。

パソコンやソフトの機能や動かし方についての本は巷にあふれているが、実際に、どんなことをパソコンにさせたらいいのか。さらには、そのためには、実際にどういうふうにすればいいのかという、パソコンを使う目的から出発した本はほとんどないのである。

例えば、パソコンで絵を書くためのソフトは多くあり、その機能を説明した説明書もたくさん並んでいる。しかし、具体的にイラストとか挿絵を書くには、どうその機能を使ったらうまくいくかということを書いた本はほとんどない。統計の分

総務庁統計局統計基準部

調査官 北田 祐幸

野についても同様である。専門的な統計分析用のソフトは、意外と製品が少なく、また専門的で価格も高価なものが多く、いざ買うとなると二の足を踏んでしまうが、一般的な表計算ソフトでも、統計表の作成を行うには、十分な機能を備えていると思う。しかし、わかりやすく美しい調査結果の資料のイメージやそれを作るためのソフトの機能の使い方などを解説している本はほとんどないようだ。道具が与えられて、それぞれの道具の使い方は分かるが、何かをするために、どういふふうに関具を使ったらいいのかについては、どこにも書いていないのである。

このような状況をみると、統計についてのパソコンの利用についても、パソコンとその解説書の氾濫のなかで、まだまだ、未開発の部分はあると思う。昨今のパソコンブームが、目新しい道具の

登場だけに終わってしまわず、みんながそれぞれの分野で本当の使い道と使い方を身につけるためには、まだまだ空白の部分が多いと思う。

解説書の洪水と並んで盛んに行われているパソコンについての研修やセミナーについても、道具の使い方に終始するのではない、本当の意味でのパソコンを活かして使う方法を教えてくれるところは意外と少ないと思う。

実は、このようなことは、パソコンやソフトのメーカーに頼るものではなく、使う人が悩みながら経験を積んでいかなければならないことではないか。一口にパソコンを使うための研修といっても、かゆいところに手が届く研修を行うのは、メーカーではなくむしろ実務に携わっている我々自身がそのパイオニアにならなければならないと思う。

